

第2回岩美海岸（陸上地区）侵食対策検討委員会議事概要（委員発言抜粋）

議題（1）

①人為的改変と汀線の経年変化、②岩美海岸（陸上地区）外への土砂流出について、③岩美海岸（陸上地区）の土砂変動量について、④H17.11竣工の潜突堤について

■松原委員

- 土砂収支はとれているものと推定という非常に確定的な形で書いてあるが、長期的なトレンドの中で、大きなイベントがあって今がある。そういう意味で、最近ようやく安定傾向に入っているという、もう少し柔軟な書き方、1万数千立米が不足しているのに安定ということが言えるのかという話もあるので、そのあたりを注意しつつ、書きぶりにもその辺を反映していく必要がある。
- ノイズ分析があって、それが比較的安定傾向になっているという証拠にもなりつつあるという意味では、分析に意味があったのかもしれない。
- 連続的にずっと土砂が移動していけば、地形変化は起こらずに移動が起こることはある。地形変化だけで土砂移動がないということは言えない。
- 浜部の底質（粒度）調査は次回の調査のときには実施すべき。

■諏訪委員

- ボリューム検討ではないが、沖捨てがあった後1995～2005に、東浜西部で汀線が後退していると説明資料p8に出ており、その後に深淺測量結果からボリューム換算するデータを整理してみたら、栗山さんの指摘あった1万m³/年程度は抜けているけども、ほぼバランスというふうに事務局として考えているということではないか。
- 漁港の深淺データがないため、土砂収支等をチェックするとしたら漁港かもしれない。
- 浜の底質調査については、バーム頂部標高1メートル、2メートル程度のところまで必要ではないか。

■宇多委員

- 2万6,000立米を沖に捨てたという事実があり、これが物すごくきいている。この小さなポケットビーチで2万6,000立米の、しかも汀線付近にあった粒径の大きな砂を沖に捨てたという行為が後々まで猛烈な影響が出たと、これは間違いない話であり、そこからスタートすべき。
- スタンスとして、イベントが起こった後に猛烈なことが起こり、それを追っかけるというのであればわかるが、ごく最近のいろんなものの調査をやってもよいが、それはノイズ分析に限りなく近い話で、こここのところの保全をどうするのという話に向かないのではないか。
- 仮に、バランス状態に行っているとするれば、以後の調査は、深淺測量のデータや何かいろいろいじくってもそれはノイズ分析になる。
- ノイズを含んでいるということをはっきり言って、その中から読み取ろうとするとやっぱり特異な情報になっちゃうから、それは棄却するということをちゃんと書くべき。データの使い方をもうちょっとうまくしてもらいたい。
- 土砂の移動状況について、漁港の防波堤の裏側等、構造物の周辺はチェックするに値する。
- 底質調査において、浜がないというのは最悪。
- 底質調査について、標高でいうと、バームをつくっているのが2メートルぐらひは楽に冬季風浪は打ち上がってくるので、その範囲のデータがないというのはよくない。
- 水深とともに中砂分が減っていく。浜としては大事なものは中砂分。そういう質的なチェックも含め

て、土砂量が1万立米消えたとかいうのではなく、その中のそれが、中砂が何千立米、細砂が何千消えたのかというぐらいのことを言わないと、後々はクエスチョンマーク。

■栗山委員

- 沖の方は深淺測量に出てくるような地形変動は見られませんでしたという結果で、それは土砂流出がないということとは異なる。
- 中でどれくらい土砂が維持されているかということが大事であって、沖の地形が変化してないからといって、中の土砂が抜けてないという結論は出せない。
- 土砂移動状況について、かなり安定しているとは言えるが、年間1万という数字は無視するには、ここの漂砂量とか考えると大きな数字だと思う。抜けている可能性があるというのは頭に入れていた方がよい。
- 年間1万という数字はそんなに大きいわけではないが、少し長目に5年間ぐらい考えると大きな数字になる。ここの対策を考えるときに、中で閉じているというふうに考えていいのか、将来的には抜けていきますよと考えるかというのは、対策の方法も将来的には変わってくる可能性もあり、そこは必ずしも安定しているわけではなく、ちょっとは抜けているという認識を持っていた方がよい。
- ノイズでやるということは、大きなトレンドがないということでもある。
- ある意味でノイズということがわかった時点で、それはそれで解析した意味があったと思う。
- 土砂移動についてやっぱり少しは沖に抜けているような気もするけどなと思うが、漁港に行っているということもあるかもしれない。
- 堆積域とか侵食域というときには、きちんとした根拠を持って結論付けるべき。サンドリサイクル量を考慮するというのであれば、考慮しても解析できるはず。

議題（2）

④被災時の土砂移動状況、⑤被災のメカニズム（被災要因の推定）、⑥被災のメカニズム（波浪場の推定）

■松原委員

- 潜堤西側の岩礁帯で砂はかぶってだろうから、砂は沖に回っていくのかもしれない。

■黒岩委員

- 今回のイベントがたまたまあったのかどうかというのものもある。今回の被災はたまたまこうであったという話で、これがすべてではない。だから被災を受けた箇所に対策をすべてするという話ではないと考える。
- 何かのイベントで、局所的に掘れている。バーの移動、トラフという話ではないかもしれない。

■宇多委員

- 深みになれば、そこからエネルギーぐっと入ってくる。それはわかっており、汀線に突っ込んでくれば、汀線は湾入し、浜崖ができるという、ただそれだけではないか。
- それをあらかじめどの位置で浜崖ができるか予見してみると、できないというのがこれの本質ではないか。これはコントロールできない。
- 深みではぐっとエネルギーが来るからイベントは起きる。そこはよく十分理解しましょうねということならば説明の趣旨は理解はできる。
- 潜堤の根の部分から漂砂が一部西側に抜けていると思うので、ここのところを非常に注目する必要があるのかなと考える。

- いろいろな施設というのはあまり前に出さず、十分後ろにセットバック、余裕とついでとてくださいなという視点も大事。
- 浜崖ができた部分と侵食域との対応が見られるようだという結論であれば理解できる。
- 蛍光砂はどうして東浜の真ん中に入れたのか。東浜の真ん中に入れて動くかって、それは東西に移動するに決まっている。対応を考えるには、東浜の砂が羽尾側に行ってはまずいということだから、そのルートはどこか。それには2通りのルートがあって、人工リーフの斜めのくの字のやつつけ根のところか、そういう部分に着目すべき。
- 蛍光砂調査をやって、これは何を徳たいからここに入れるのかという目的意識を明確に持って調査はやっていただいた方がよい。
- 人工リーフの裏側か前側かどっちかを通過して、ごくわずかな量は西側に、羽尾側に行くというときに、それを何か防ぐことができるのかできないのかというのがまず判断の分かれ目となりうる。
- 例えば、潜堤の付け根付近に少し石を置くなりして、西側へ行くのをストップかけるとか、そこで漂砂が動いているかどうかというのをちょっと調べてみる必要があると考える。
- コンパクトで、ただ、非常につぼを得た対応ができるかどうかというあたりを突きとめる必要があるかなと考える。
- 砂が一粒も西側に行ってはいけないということは言わなくていいけど、かなりスローダウンしていただいて、東浜の漁港にたまるんだけど、その量が相当小さくなったというような方向を目指していただければよいのではないか。

■栗山委員

- いわゆるリップチャンネルと言われる沖の方から深みがずっと岸まであるよという深みとはわけが違う。だからある意味ではこういう地形はバーの位置が変わる可能性はあるにしても、沖から岸に向けてずっと深みがあるという地形とは違うから、そういう意味ではちょっとぐらい地形が変わっても、波の大きい場所はそうは大きく変わらないかもしれない。変わるかもしれない。

議題（3）

⑦対策案抽出に向けた課題と対策方針（案）、⑧今後の調査及び検討方針（案）

■松原委員

- 宇多委員が言われる潜堤付近の小規模な改良については、検討課題の一つにしてもよいと考える。
- そういう答えを導けるというか、そういう答えがどこにあるのかという、そのための調査を行う必要があるということではないか。
- そういうようなところが提案できるような調査ということを事務局には検討してもらいたい。

■宇多委員

- 本当に地域の人々が求めているのはこういう公園の中で、今までやってきた公園のよさをもうちょっときちんと整理していただいて、それから今までやってきたいろんな行政的行為もあるし、漁港もそれなりに維持していかなきゃならないという背景もあるわけだから、そういう中でこの地域をどうしたいのかという話をしないといけない。
- サンドリサイクルとかいろいろあるけれども、漁港側に砂が行くと漁港としては困るから、それをできるだけ小さくしてあげることが、対策の公平性だと考える。
- 養浜については、系外から2万6,000立米持ってこようという話があったけれど、気をつけてほしい。今の状態はある程度バランスしてきているから、そこに一気に入れると、計算をやるまで

もなく、満遍なく土砂は広がろうとするから、漁港の堆積がふえる。あんまり劇的に変えようとせずに、ほぼバランスした中で、だけど今でも問題あるわけだから、それを解決しましょうというような方向に持って行っていただくのが一番リーズナブルだと考える。

○サンドリサイクルを前提にすると、漁港に急速に戻るのはやめてほしいなという願いを込めるような策が打てるかどうかを課題と考える。そういうことを念頭においた調査を実施すべき。

○くれぐれも国立公園を台なしにするような、コンクリート構造物を構築することは避けていただきたい。

■栗山委員

○今の潜り突堤をもう少し岸の方に延ばすという選択肢もあるかもしれないというようなことも検討の中には入らないだろうか。

■山崎委員

○海の中は潜ないと見えないので、基本的には陸上から見たときの風景ということで、自然の風景を守る場所ということで国立公園に指定されている場所なので、そういった意味では、波がかぶったり海面より上に上がってくるものよりは、海中の中でおさまる構造物の方がこちらとしてはありがたい。

○効果も含めて、何のためにやるのかという目的と効果と、そのストーリーというか、流れがわかって、納得できるものであれば公園法上の問題ないと思う。